

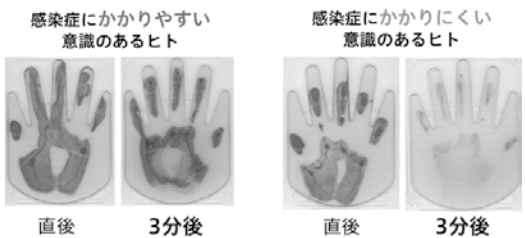
感染症に対する手指本来が持つバリア機能を発見

花王

花王は、ヒトの手指には生来、感染症の原因となる菌やウイルスを減少させるバリア機能が備わっており、風邪やインフルエンザのかりやすさに関連していることを世界で初めて明らかにした。また、手指のバリア機能には個人差があり、この機能には汗から分泌される乳酸が寄与していることを解明した。

これまでの手指衛生の手段である手洗いやアルコール消毒の菌やウイルスの除去・不活化効果は、一過性のものであるのに対して、生来の手指のバリア機能は恒常的であることから、このバリア機能の発見は、生来の手指のバリア機能を高めるという新しい衛生習慣の提案につながるという。

12月14日にはオンラインで説明会が開催され、柳澤友樹 パーソナルヘルスケア研究所長が今回の研究成果の背景について次のように説明した。



「約4年前より新しい社会貢献のあり方を考える中で、『衛生』を一つの生プロジェクトが立ち上がった。各部門からエース級のメンバーが集結し、花王らしい提案ということで『日常生活の感染現象』に着目して研究を進めた。2017年4月には花王パーソナルヘルスケア研究所内に『衛生プロジェクト』が立ち上がった。各部門からエース級のメンバーが集結し、花王らしい提案ということで『日常生活の感染現象』に着目して研究を進めた。2017年4月には花王パーソナルヘルスケア研究所内に『衛生プロジェクト』が立ち上がった。各部門からエース級のメンバーが集結し、花王らしい提案ということで『日常生活の感染現象』に着目して研究を進めた。

手洗い・消毒ではカバーできない合間を乳酸のバリア機能で補完

感染症の伝播において接触感染は重要な感染経路で、中でも手指は、もろのを持つ運動機能のほかに、触ることで対象物を長く共存してきたため、進化の過程で感染症を防ぐ多様な免疫機能を獲得してきた。抗体は体内の免疫機能の1つだが、今回は、ヒトと体外との界面（ヒトの表皮の感染防御機構）に着目。感染にかかりにくいヒトと感染にかかりやすいヒトとを比較し、手指のバリア機能の個人差を明らかにした。その結果、評価に用いた対象にした数日間の調査で、手指表面の成分の抗菌活性が高いことがわかった。さらに、10名のヒトを大腸菌と黄色ブドウ球菌のいずれの菌・ウイルスに対しても高い効果を持つヒトや、その逆のヒトがいることもわかった。その結果、評価に用いた対象にした数日間の調査で、手指表面の成分の抗菌活性が高いことがわかった。さらに、10名のヒトを大腸菌と黄色ブドウ球菌のいずれの菌・ウイルスに対しても高い効果を持つヒトや、その逆のヒトがいることもわかった。その結果、評価に用いた対象にした数日間の調査で、手指表面の成分の抗菌活性が高いことがわかった。さらに、10名のヒトを大腸菌と黄色ブドウ球菌のいずれの菌・ウイルスに対しても高い効果を持つヒトや、その逆のヒトがいることもわかった。

備わっている、その機能には個人差があり、その機能が恒常的に高いヒトがいるとの着想を得た。その両方に対して相関がある複数の化合物の中で、抗菌活性が向上するところを確認した。最後に柳澤氏は、「ハッ。その合間を、手に」と語った。

化粧品通販ビジネス実践講座

Vol.85

コンセプトシートを作ってから、ツール制作に取り掛かる

船生千紗子（ふにゅう・ちさこ）

通販に特化した広告代理店を経て、株式会社通販総研に入社。現在、化粧品通販新規参入支援、化粧品通販企業向けに新規顧客獲得、リピート顧客育成による売上アップ支援を行っています。クライアントの強みを伸ばし、着実な成長を促すことをモットーにしています。

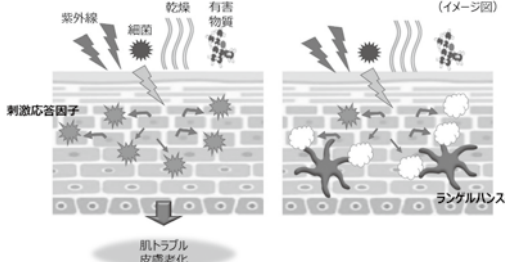


ツールの制作を行う際に、いきなりイラストレーターなどを使って制作に取り掛かってしまうことはないでしょうか？制作自体に慣れている場合は良いのですが、まだ制作そのものに慣れていない場合はコンセプトシートを作ることをお勧めします。

どんな目的で、ツール制作を行うのか？達成したいゴールは何か？その上で、どんなキヤッチコピーで読み手の関心を引き付け、伝えたいことは何で、どのような優先順位を付けて表現するかを書き出していきます。このようなコンセプトシートを作らずに制作に取り掛かると、次第に伝えたいことが散漫になり、読み手に伝わらない、さらに修正しようにも、そもそも何を伝えたいのか明確にしていなかったら、修正もできないといったことに陥ってしまいます。

化粧品通販会社A社では、単価アップを目指し、クロスセルチラシを作ることにしました。その制作を自社で行うことにしたのですが、担当のスタッフは、ツール制作を行うこと自体が、ある意味初めてでしたので、最初は、こんなことや、こんなこともツール内で表現したいとなり、優先順位が曖昧になっていました。

●ランゲルハンス細胞の刺激応答鎮静化機能（イメージ図）



研究では、まずL細胞の免疫応答を担う鎮静化酵素の発現には、皮膚の防御機能を高めるようなケアが必要であることが示唆されている。

男性ホルモンにより皮膚免疫が低下する仕組みを解明

資生堂は、男性ホルモンによりランゲルハンス細胞（L細胞）が担う皮膚免疫が低下するメカニズムを解明した。また、男性ホルモンは、L細胞の重要な機能の一つである刺激応答鎮静化機能を低下させ、さらにはL細胞の誘引因子の発現を減少させることでL細胞の成長を阻害することを発見した。さらに、椿の花や葉から抽出した複合成分（カメリア複合体）が、男性ホルモンによって低下した皮膚免疫を顕著に回復させる効果があることを見出した。

今回の研究成果を活用し、男性ホルモンと皮膚免疫に着目した、男性の皮膚本来の力を引き出す新たなアプローチを提案していく。

12月2日に開催された「男性肌研究に関する新発見」をテーマにしたオンライン技術セミナーにて、資生堂グローバルイノベーションセンター

の発現が著しく減少し、L細胞の機能が低下することがわかった。また、その減少はカメリア複合体により顕著に改善された。

続いて、L細胞前駆細胞を表皮へと誘引する因子（CXCL14）の発現への影響を調べたところ、男性ホルモンによりCXCL14の発現量が著しく減少し、L細胞の成長が抑制されていることがわかった。また、その減少はカメリア複合体により顕著に改善された。